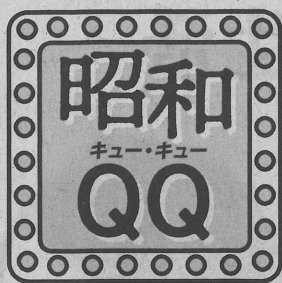


たった20年で消えた「昭和町」なぜ移住者が？



1926年12月に大正から改元されると「昭和」と名のつく自治体や地名が全国に相次いで生まれた。岡山県にも「昭和町」が52(昭和27)年に発足。わずか20年後には総社市に編入され、閉町した。自治体名から「昭和」は消えたが、この春には「昭和」の名を受け継ぐ義務教育学校が開校する。地域外から人呼び込む移住支援も進み、まちは新たな命が吹き込まれる。

昭和町は県中南部、高梁川沿いにあった日美、水内、下倉、富山の4村が合併し誕生。昔から関係が深かった4村。戦後の51年、県が人口の少ない自治体に合併を勧めると即応し、早々に話ままとまった。

町史によると、新しい町名は旧村に関係ある地名からは採らないという暗黙の了解があった。改元直後の27(昭和2)年、富山村を除く3村で「昭和公民学校」が設立され、戦後、それを受け継いだ「昭和中学校」が4村で運営されていたことから、一体性の象徴として、新町名に「昭和」を採用した。

だが、出稼ぎや離村が相次ぎ、合併時に約8千人いた町民は、20年も経たずに6千人を切る。町は70年末、総社市に合併を申し入れ、72(昭和47)年4月に短い歴史を閉じた。

五つの学校・園統合 輝き新たに

そうした背景を持つ総社市の昭和地区で、最近新たな動きがある。

昨年10月末、町名のもととなった昭和中学校に地区の子どもたちが集まった。二つの小学校と一つの中学校、そして二つの幼稚園に通う約200人の児童生徒、園児たちだ。

五つの学校・園は、今年4月に再編成され、幼稚園が付属する義務教育学校に生まれ変わる。校名は「昭和五つ星学園」。この日は、アルピニストの野口健さんに名誉校長

Q Q

を委嘱する委嘱式があった。

野口さんは「学校でテント生活をしたり、山に木を植えたにしたい」と抱負を語った。

岡山市や倉敷市のベッドタウンとして人口減を免れる総社市だが、昭和地区は72年の合併時の半数以下の2千人台まで減少した。

片岡聡一市長は「昭和再生」を掲げ、2014年度から地区を「英語特区」に指定した。幼小中が連携して英語教育を進め、学区外からの転入も認める。今年度、学区外

からの子どもは旧町内の4校・園で計71人に上り、全体の



昭和中学校の体育館に、今春から「昭和五つ星学園」となる2小1中2園の子どもたちが初めて集まった。昭和五つ星学園の名誉校長を委嘱された野口健さんと子どもたちがふれ合った

約4割を占める。春からの義務教育学校では、幼小中の12年間を、3年、5年、4年で区切る一貫教育に取組む。引き続き全国から入学や転校を受け付ける予定だ。

「昭和」を残す学校名に、野口さんは「昭和の時代の(子どもたちが)やんちゃだった部分を取り戻したい」と話した。

Q Q

地区では移住者をサポートする取り組みもある。

昨年12月上旬、かつて昭和町役場があったJR伯備線・美袋駅前。広場にステージや屋台が生まれ、大勢でにぎわっていた。21年にオープンした交流施設「みなぎの里 大國屋」の2周年記念イベントだ。

人混みの中に、米カリフォルニア州から移住先を探しに来たジョセフ・ホントンさん(65)と妻博子さん(67)の姿もあった。「移住を希望しています」。急きよステージに上げられると、こうあいさつ。



いづれも2023年10月、岡山県総社市

「みなぎの里 大國屋」の2周年イベントに集まった人たち。山田ゆきえさんや、ジョセフ・ホントンさん夫妻も参加した。後方の昭和公民館の場所に、かつて昭和町役場があった。23年12月、総社市



大きな拍手を受けた。

夫妻の案内役を務めたのは、移住を支援する「おかわりま昭和暮らしプロジェクト」の代表、山田ゆきえさん(76)。岡山県立大に勤務していたころ、教員の家探しを手伝ったのをきっかけに、あちこちで空き家を紹介するように。移住者や地元団体、市で始めたこのプロジェクトに14年の立ち上げ時から参加してきた。物件の案内やお試して泊まれる住宅の紹介、地元の人との縁づくり……。きめ細かいサポートで、一昨年末までに昭和地区に22世帯約60人が移住してきた。ホントン夫妻も昨年8月に初訪問。博子さんは「温かい人たちにつないでもらえて、がっちり気持ちをつかまれました」。

プロジェクトは今年度で10年目。市から助成金を受けてきたが、市の担当者によると、次年度も同様に助成が続くかは未定だ。地域一体化のシンボルだった中学校が生まれ変わる今年は、新たな節目になるかもしれない。(大野宏)